



沖

俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

# 苔衣

能村 研三

デジタル時代

七月二十四日にテレビのアナログ放送が終了し、すべてがデジタル放送に移行されると言う。この機会にテレビは見ないことにする人もいると新聞の片隅に載っていた。昨今のテレビ局の企画の貧しさからすればある意味で頷ける話であるが、しかしこの時代の進行に抵抗あるいは逆行しても詮無きことである。

後ずさりして見る実梅まだあるは

放蕩もゐる家系図や枇杷啜る

法科出の理論武装や梅雨寒し

空腹のうへの立腹虎が雨

これも独特の記号で訂正した。昔は、書き手の息の通った原稿を、その息の気迫を感じながら職人が植字をした。しかし、現代は書き手からデータ渡しとして、データが印刷のラインに乗って、スピードと均一品質が問われる時代になった。

そして本を売る側の事情も大きく変わっている。街の小さな書店がどんどん潰れ、書店という販売形態

箱根 三句

右読み「函嶺洞門」梅雨深し

走者には孤高の坂や青時雨

朝涼や宗祇の墓の苔衣

はたた神安全神話消え去れり

梅雨明けぬたまむし色のころかな

滝落ちる瞬に無音の世界あり

が揺らいでいる。俳句の雑誌は大型店舗に行けば買えるが、句集などは地方の書店ではほとんど置いていない。その反面インターネットの検索による販売で、一兩日のうちに書籍が自宅に配送されるようになった。これも大変便利なようだが、書店に行つて時間を潰しながら他の本を見る余裕は無くなってしまった。その上、本は嵩むものとして電子書籍なるものも登場し、紙から画面の字面を追うような時代になってきている。

デジタル時代を迎え、俳句の在り方、句集の在り方は変わっていくのか。少し前までは、そんな時代の流れと関係のないところで、俳句は生き続けると考えていた。詩歌を詠む人には時代の風潮などに流されないところが底流にあると考えていた。しかし、現に新しい書店の形態、本の形が現れて来ている現在、詩歌の在り方について改めて考えてみる必要もあると思う。

私が書く「沖」の原稿も、原稿用紙の手書き時代から、ワープロになり、そのワープロも既に製造中止となり、職場でもコンピュータを使用しないと仕事ができなくなつてしまった。私たちは否応なく時代の波を浴びて生きていかなければならぬのだろう。

# 蒼茫集



こころ接ぐこと

酒本八重

蝌蚪泳ぐ友達ゐても居なくても  
嫁ぐ気も娶る気もなしかたつむり  
この灯り昔のものや帰省せり  
青葉木菟無欲な声でありしかな  
意思継ぐはこころ接ぐこと朴咲けり  
茅花流しみんな忘れぬ人ばかり

海 月

安居正浩

力抜く海月は水になるために  
甚平のあまりに似合ふことかなし  
夏布団夢の国から逃げたがる  
振花や道草の空新しき  
全山を祈りごころに山法師  
万緑や土偶豊かな腰まはり

鏡中会話

千田百里

先づ楽にお座りなさい夏料理  
清水汲むペットボトルのすぐ曇り  
水無月の風が手荒に閉めるドア  
美容師と鏡中会話アマリリス  
ベイブリッジを渡る夏銀河を渉る  
寝ぬる釈迦もをろがむ我も素足かな

一抜けて

田所節子

とんとんと紙を揃へて雲の峰  
一抜けて二抜けて牡丹崩れけり  
密議のやうにどくだみの咲いてをり  
少し寝て疲れ癒さむ青葉木菟  
海晴れて茅花流しの分離帯  
天上に祈りの一花朴咲けり

低 唱 北川英子

星見ゆるほどに灯ともし夏料理  
夜風かなワインゼリーに酔ふなんて  
遊船の舳先に吹かれぬて低唱  
見つめ過ぎしかほうたるの息かすれ  
湯上りの足裏が過ぐる籐むしろ  
花椎の散りルーキーに落し穴

郷の時計 成宮紀代子

嘘を打つ郷の時計や明易し  
昼顔の絡む畑の蛇口かな  
夜濯ぎや星を透かせるほどのもの  
香水のかつかつかつと来たりけり  
車椅子灼けし両輪手で廻し  
あらかたの役終へ茅の輪くぐりけり

被爆灯台 荒井千佐代

朝風の楯聖鐘は撞かずおく  
迎へくれし信徒代表日焼けして

梅雨兆す礼拝堂の列柱に  
ユツカ咲かせて深閑と司祭館  
蛇殻へ懈たゆき一步を近づくる  
洞太たき被爆灯台 旱星

聖水の跡 吉田政江

長崎行  
麦秋の海光返し天主堂  
貝皿に聖水の跡緑さす  
懺悔室の絹のまじきり薄暑光  
岩清水伝ふるルドの聖母徑  
卓袱の三段重ね夏きざす  
ミ口展の赤の弾けて街薄暑  
水源 久染康子

水源に青竹の樋山開  
下流より闇に迫り出す鵜飼舟  
青山河釣竿ゆるき弧を描く  
明解な竿師の系図涼しかり  
小鼓の音の泉を汲み帰る  
蟻螻を払ふ手足のをどりけり

万緑叢中 菅谷たけし

ためらはず尾を捨ててゆく蜥蜴かな  
万緑叢中カーナビに逆らへり  
青時雨まだこれからの人の葬  
根付きたる早苗いつしか畦隠す  
一叢の紫陽花白を押し通す  
朝ごとに掃く姫沙羅の一夜咲き

鉦 穴 松井志津子

夏 燕 病 衣 に 緩 き 鉦 穴  
かなしみの夏どこまでも海碧き  
団扇太鼓橋渡りゆく薄暑かな  
独歩詩碑海霧と遊んでゐるやうな  
捲き上げて海近うせり青簾  
水音に聴き入るほたる袋かな

藻の咲いて 楠原幹子

花菖蒲まつさらの色ひろげけり  
家族てふゆるき束縛藻の咲いて

機窓より玻璃の散乱水張田

夏うぐひす自己陶醉の境地かや  
腹蔵のなくて水母に癒さるる  
帰宅してメロン一個の空気かな

万 緑 宮内とし子

貝殻をびつしり敷きて島薄暑  
花うつぎ生みたて卵掌に受けて  
まつ先に乾びしものに蛇の衣  
藍浴衣鼻緒を少しゆるくして  
まつり自肅人形焼をわけ合うて  
万緑の山彦きつと若き声

聖 歌 廊 大川ゆかり

紐綴ぢの作文集や鳥の恋  
母の日のゆつくり過ぎてゆく時間  
聖母崎吟行三句  
風みどり刻翳りたる聖歌廊  
聖水を入るる貝殻新樹光  
更衣してシスターのきびきびと  
荒梅雨の通らぬ千枚通しかな

風の整列

細川洋子

植田いま風の整列始まりぬ  
田を植ゑてゆく空深く苗浅く  
白日傘四の五の言はずついて行く  
掘割に藻の翳々と半夏生  
人に倦み人に癒され心太  
仏壇へまつすぐな風青網戸

木場堀

鈴木良戈

梅雨濁る河を見つむる芭蕉像  
木場堀の水量豊か繭の花  
青鷺や堀波ときに太く寄す  
良く釣れる夜釣それぞれ忍び声  
六月や北斗七星弓なりに  
夏風邪の身の芯までも食ひ込めり

金銀花

大畑善昭

ビル解体安全祈願夏つばめ  
地水火風空の中なる雀の子

金銀花短文一つ脱稿し

雀色時竹の子が二本生え  
男郎花男はいつもやさしくて  
卒塔婆の梵字の淋漓黒揚羽

古書店

上谷昌憲

古書店の奥の時計に緑さす  
目高ひねもす急発進急停止  
ナイターの先制点に押し黙る  
瑠璃蜥蜴その残像の赤から黄  
辣蕪噛む朝の雨の明るさに  
枇杷熟れて胸襟ひらく安房の海

天金の花

河口仁志

竹皮を脱ぐ恥らひのなかりけり  
明日に蒔く花種一夜枕上  
抜きん出て天金の花泰山木  
日本列島半身浴の梅雨入かな  
刃こぼれのやうなひとひら花卯木  
初蟬のもう出る頃か登四郎忌

# 潮鳴集

声帯 甲州千草

月の面の濃淡実梅こぼしては  
髪洗ふ度に出でくる一場面  
深梅雨の指人形に声を足す  
声帯の若くならむと桃を剥く  
まだだれも乗らない遊具夏の蝶

息のいろ 富川明子

ヨーヨーのひゆんと延びたる雲の峰  
更衣背負ひしものの外しどき  
ためらはぬとは竹皮を脱ぐかたち  
父の日や柀目通せし暮しむき  
さみどりは草蜉蝣の息のいろ

ときめき 菊地光子

街騒の穂先にのこり夜の噴水  
硬貨一枚プールの底をときめかす  
立葵いつからポスト四角なる  
梅雨寒や年齢欄のある署名  
島々を重石に夏の海たひら

突き放す 石田静

ゆるやかに阿弥陀聖の薄衣  
口紅を変へ三月を突き放す  
白南風や湘南新宿ライナー来  
吉報の息せき切つて遠青嶺  
田起しも為らず拳の行き処



# 沖作品



## 能村研三選

市川市

荒井千瑳子

月を得て切絵のごとき夏の森  
朴の花離るるほどに数見せて  
夏川の見えて古民家コンサート  
抜け道にると潜めり著義の花  
三伏の祠に神の見あたらず  
岩魚釣り石に片膝ついてをり

岩手

浅沼 久男

風薫る庭師ふたりの小昼時  
滝になることを知らざる流れかな  
夕河鹿石の色して石の上  
代掻いて泥の匂ひの父帰る  
啓蟄や本にはさまれ正誤表  
待春の耳あてて聞く木の鼓動  
のどけしや仁王真つ赤に紙まとふ  
花冷やこけしの首はきこと鳴る  
古里は通過駅なり鳥帰る

東京

能美昌二郎

榊聖鐘ローマ引きよす風青し

千葉

清水佑実子

まつ先に見ゆる教会遠青嶺  
オルガンの卒寿の指や緑さす  
段畑の聖母の風や枇杷うるる  
「沈黙」の一行しみぬ冷し酒  
息吸つてC T スキャン夏初め  
万葉の景に入るとと田植かな  
網戸越しつと見れば妻庭仕事  
吾のなぜ生きるか儼の書を売らむ  
夏瘦せて詩囊の瘦せて病得し  
北上の桜吹雪やレクイエム  
花きぶし揺るる穂先の雨霽  
葉桜や採決万場一致にて  
柿若葉に被はれてゐて明るかり  
植田今産毛のやうな苗揺るる

（遺稿周作記念館）

松岡 三夫

澗田 則子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

月を得て切絵のごとき夏の森 荒井千瑳子

森には四季それぞれの美しい顔がある。萌黄色の春・深緑の夏・錦絵の秋・墨絵の冬。夏は草や木々が最も生き生きしている時期で、月光に照らされた森は独特の表情を見せる。シルエツトとして映し出された夜の森の風景は、白と黒のコントラスト、繊細な線と大胆なカットで描かれた切絵の世界のようだ。美しく幻想的な句として注目した。

滝になることを知らざる流れかな 浅沼 久男

後藤夜半の代表句に「瀧の上に水現れて落ちにけり」があるが、この句もある意味では同じ視点に立った句である。滝は河川工学上川の一部とされる。地形的に急激な段差が生じて、ある時は直角に落下するときもある。滝を擬人化した句で、平穩に流れていた川の水も滝壺に真つ逆さまに落とされるとは想像もしていなかっただろう。

啓蟄や本には生まれ正誤表 能美昌二郎

本来、単行本等を刊行する出版では、正誤表を入れるなどはあつてはならないことである。念入りに繰り返し校正によつて間違いない本を提供することが出版社の使命でもある。しかし、間違いが見つかったからには正誤表を入れて誠意をみせることが必要だ。本の見開きのページには生まれた正誤表が見つかった。正誤表は本文よりやや小さな活字を使っていた。啓蟄の季語の使い方が面白い。

橿聖鐘ローマ引きよす風青し 清水佑実子

先日九州大会の翌日、長崎支部の皆さんのご案内で善丁谷教会を吟行したが、この句はその時の句である。細い山道を上り詰めたところに教会があり、そこからは眼下に紺碧の海も見ることが出来た。教会の庭には榊の樹があつてそこに聖鐘が吊るされていて、鳴らしてみた。山中に響き渡る鐘の音で、隠れキリシタンがこの山里で静かに信仰していた様子が蘇ってきた。この鐘の音も遠くローマから聞こえる信仰の鐘の音でもあつた。

万葉の景に入ると田植かな 松岡 三夫

万葉集にも「田植」は多く詠まれているが、奈良時代の水稻耕作は、直接籾種を蒔く直播式から苗代で育てた苗を移植する田植式へ移行する過渡期にあたり、二通りの方法で田植を行っていたと言う。今でこそ田植は機械が主流になってしまったが、農耕民族を誇りとした日本の心が今でも日本の風景の中に伝わっている。(以下略)